



【2023年度第1回文化交渉学ワークショップ講演
①】 P.A. ソローキンと移動 : コミ、サンクトペテル
ブルク、プラハ、ミネソタ、マサチューセッツ

吉野, 浩司

(Citation)

海港都市研究, 19:71-72

(Issue Date)

2024-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100488383>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100488383>



【2023 年度第 1 回文化交渉学ワークショップ講演①】

P. A. ソローキンと移動

——コミ、サンクト ペテルブルク、プラハ、ミネソタ、マサチューセッツ——

吉野 浩司
(YOSHINO, Koji)

要旨

20 世紀は戦争と革命の時代であったとともに、亡命と移民の時代でもあった。社会学者らも、その時代に制約を受けている。人間の考えには、緻密な思考、せせこましい思考、悠然たる思考、せっかちな思考などさまざまあるが、多くの場合それらは、考える人の置かれた環境に大きく依存している。ではピティリム・アレクサンドロヴィッチ・ソローキンの壮大な構想力を持った社会学は、いったいどこからきているのだろうか。地理的ないし物理的に、あるいは学問的ないし精神的に、一つのところにとどまることなく、絶えまなく移動を続けたことに、それは起因しているようである。

1889 年、ソローキンはロシア北方の雪深いコミという寒村に生まれ育った。父は村々を回る聖像職人、母はコミ族の出身であった。幼くして母を失い、父とも生き別れた。聡明であった彼は、一念発起し、サンクト・ペテルブルクを目指した。お金をほとんど持っていない彼の大都市への旅は、無銭乗車であった。田舎者のソローキンは、ペテルブルクの都市的文明の粋を味わいつくした。ペテルブルク大学での彼は、ほどなくして M. コヴァレフスキー（古代史、人類学）、L. ペトラジツキー（法社会学）、V. ベフテレフ（精神医学、反射学）ら当代一流の学者に認められ、学問の世界で頭角を現す。さらにケレンスキー臨時政府が成立したときには、この内閣に秘書として参画する。しかしボルシェビキ革命の結果、彼はたちまち政治犯に転落してしまう。

こうして 1922 年、ソローキンはプラハで亡命生活を送りつつ、T. マサリク、A. ブラハラ、チェコスロバキア社会学の創設者らとの交流を行う。多くの亡命ロシア人がそうであったように、ソローキンも一時は、このプラハの地で第二の人生を送ることを真剣に考えた。その考えは、E. ロッスらの招きにより、アメリカに渡るチャンスを得たことで打ち消された。

1924 年にアメリカに到着したソローキンは、亡命ロシア人としてアメリカ人の前でロシア革命に関する講演を行った。それが評判となり、ミネソタ大学で社会学を講じることとなる。その後の活躍ぶりは、『革命の社会学』（1925）、『社会移動』（1927）、『現代社会学理論』（1928）といった大著を立て続けに発表したことにも表れている。世界の社会学の成果をふんだんに盛り込んだこれらの著作に、当時のアメリカ社会学者たちは瞠目した。ミネソタでの仕事の締めくくりは、C. C. ジンマーマンと協力して、科学的な農村社会学を完成させることであった。『農村・都市社会学原理』（1929）と『農村社会学文献集成』（1930 - 1932）は、この分野の金字塔となっている。なお日本では、鈴木栄太郎の影響もあって、ソローキンといえば、農村社会学者であるとの印象が強い。

そして1930年には、マサチューセッツに移り、ここが安住の地となる。伝統的なシカゴ大学、コロンビア大学に拮抗しうる、ハーバード大学社会学部を創設するために、世界的な社会学者のネットワークを持つソローキンに白羽の矢が立った。欧米はもちろん、ロシア、チェコ、ポーランドの研究者らを動員し、全4巻の大著『社会文化的動学』（1937 - 1941）を完成させた。のちのパーソンズらによる、ハーバード大学社会学部創設の土台作りをしたといっても過言ではない。

しかしソローキンは、しだいに『危機の時代の社会哲学』（1950）、『権力とモラル』（1954）など思想的な書物が多くなり、他方、社会学の実証主義的風潮の行き過ぎを揶揄するような著作『現代社会学と関連諸科学の流行と弱点』（1956）を書くなどしたため、学会では完全に辺境の地に追いやられてしまった。利他主義研究にのめりこんだ晩年のソローキンのことを、L. コーザーは第二の亡命と評した。1950年代のソローキンは、自らの評価に対し不満であったことだろう。ようやく1965年に第55代アメリカ社会学会会長に選ばれたことで、彼は生涯の大団円を迎えることができた。そしてついに1968年、波乱に満ちた彼の人生は幕を閉じた。

ロシアの田舎の貧しい村落に生まれたソローキンは、学問と政治の中枢において、高い評価を得たかと思うと、亡命を余儀なくされる。アメリカでは社会学の新分野の開拓者となったかと思うと、痛烈な批判とその後の無視とを経験する。彼は地理的にも、学問の選択においても、また社会的評価の面でも、移動の激しい社会学者の一人であったといえるだろう。しかし、こうして彼の生涯を振り返ってみるにつけ、このような人生の苦楽をともなう移動の経験なくして、上記のような個性あふれる名著群は書かれえなかったことに疑いはない。まさに移動は彼の社会学的思考を強靱なものとした。

付記

本講演の内容は、科研費・基盤研究(B)「〈善く生きる〉ための社会学の基盤構築：亡命知識人の一次資料の国際共同学術調査」(19H01585、研究代表者：吉野浩司)の助成を受けた研究成果の一部に基づいている。

参考文献

- 吉野浩司, 2009, 『意識と存在の社会学——P.A.ソローキンの統合主義の思想』昭和堂.
吉野浩司, 2020, 『利他主義社会学の創造——P・A・ソローキン最後の挑戦』昭和堂.
吉野浩司・吉田耕平・磯直樹・梅村麦生, 2021, 「〈善く生きる〉ための社会学の系譜——スラヴ地域からの亡命知識人が残した遺産と展望」『長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要』19:1, (2023年12月8日取得, <https://wesleyan.repo.nii.ac.jp/records/922>)

(鎮西学院大学現代社会学部)